

被災地で手しごとを実践する女たち

—宮古市田老地区を事例に—

Women who practice handiwork in the affected areas

—A case study of Taro district of Miyako—

佐藤悦子*1, 南正昭*2, 添田文子*3

Etsuko SATO, Masaaki MINAMI, Ayako SOETA

要約

本論文では、宮古市田老地区を事例として、東日本大震災からの復興過程にある被災地の日常の実践について探求するため、女性たちがどのように手しごとの場を形成し、実践しているのかを明らかにする。被災地において女性たちは集会所を中心に「〇〇の会」というようにグループ名を掲げ、さまざまな手しごとを行っている。女性たちの「集まり」の形成は、彼女たちにとって「身近な」ものと感じる支援が契機となるとともに、主体的な対応の結果である。手しごとが実践される集会所では重層的な関係性が構築され、多様な葛藤や苦悩を抱えながらも、女性たちの実践は集まり内部だけではなく、主体的に社会的世界へと参加していく過程にあるといえる。

キーワード: 日本語 (5語以内) 東日本大震災, 女性, 手しごと, 実践, コミュニティ

Keywords: 英語 (5語以内) East Japan great earthquake, women, handiwork, practice, community

1. はじめに

東日本大震災によって、被災者たちは多くのものを失った。それは、これまで慣れ親しんだ町並みや住み慣れた住家、築き上げてきた財産、大切な人たちなど目に見えるあらゆるものである。しかし、震災によって一変してしまったものは、町並みやモノなど目に見えるものだけではない。これまでの人々のつながりなど目に見えないものにも大きな変化を与えた。震災直後から、住家を失った人と失わなかった人との間には軋轢があるし、「震災後、これまで親しかった友人・知人から心無いことを言われた」というような語りは被災地の調査でよく耳にした。また、東日本大震災によって、被災地からの人口流出には一層拍車がかかり、地域コミュニティの人材不足や高齢化への危機感は漂っている。

このような中で、震災から4年が経過し、高台移転事業や土地区画整理事業が急速に進み、被災者の

生活再建へのスピードは加速しつつある。それに伴い被災地において新たなコミュニティをいかに形成するのかということは重要な課題となっている。例えば、宮古市社会福祉協議会では、平成26年度の復興支援の柱を「地域コミュニティ支援」へと移行し、生活支援員の廃止と地域コーディネーターの増員を行っている¹⁾。

一方で、これまでの復興過程において被災者は人と人とのつながりを再構築し、さまざまな実践を行ってきた。例えば、「災害ユートピア」²⁾と呼ばれるような相互扶助的な集団、避難所における共同生活集団、仮設自治会、今後のまちづくりや自主防災組織などについて住民が議論する検討会、NPO団体などが形成されてきた。このようなことから、東日本大震災からの復興プロセスにおいて生成や消滅、変容する「集まり」⁽¹⁾に焦点を当てる。木村(2013)は、復興プロセスにおける「すまいの移転」を契機にし

*1 岩手大学地域防災研究センター 特任助教

Specially Appointed Assistant Professor, Research Center for Regional Disaster Management, Iwate University

*2 岩手大学大学院工学研究科 教授

Professor, Graduate School of Engineering, Iwate University

*3 岩手大学三陸復興推進機構 プロジェクト技術補佐員

Specially Appointed Assistant Technical Staff, Organization for Revitalization of the Sanriku Region, Iwate University

た住民の組織化に焦点を当て、「集まり」をひとつの「コミュニティ」の表出として見るのではなく、さまざまな関係性や差異、広がりなど詳細に捉える必要性を論じている³⁾。以上のことを踏まえ、本稿では「支援」による住民の組織化に着目し、「集まり」を巡る関係性や実践について明らかにする。

2. 研究の目的と方法

2.1 研究目的

本稿では、東日本大震災の復興プロセスにおいて、どのように女性たちは手しごとの場を形成し、どのように実践しているのかを探求する。これまで人類学において、復興プロセスに関する研究は多くなされてきた。たとえば、林 (2008) は津波災害被災地から集落移転した住民生活を報告している⁴⁾。また、金谷 (2008) は住宅移転をグローバルな復興開発との関わりにおいて報告している⁵⁾。こうした研究は被災者の生活再建に焦点が当てられているものの、被災地における女性たちの具体的な日常生活についてあまり注目されてこなかった。そこで、本稿では、復興過程にある被災地の日常的実践に焦点を当てる。田辺 (2002) によると、日常的実践とは、「過去の単純な再現ではなく、それぞれの場面において能動的に社会にかかわりながら社会的世界を構築していく過程⁶⁾」である。従来、人類学では加速して変動する世界における人々の日常的実践を捉えようとしてきた²⁾。そうした試みはとりわけ既存のコミュニティですでに遂行されている日常的実践に焦点が当てられる傾向があり、その生成過程や変容、差異のありようまでは十分に検討されてこなかったといえよう。

田辺 (2002) は、日常的実践にアプローチするには、状況論的視点が有益な示唆を与えるという⁷⁾。教育学の分野においても、学習や実践を状況論的・関係論的視点から論じてきた。たとえば、佐伯 (1995) は、「学び」を「文化的実践への参加」と呼び、集団の外側に向かい関係性を構築する過程であるという⁸⁾。このようなことから、本稿では、災害により「日常」が一変した被災地において、変動を伴いながらも、いかにして日常的実践が営まれてきたのかを状況論的・関係論的視点から探求する。

東日本大震災後、宮古市田老地区において、住民によってメンバーが構成され、組織化された「集まり」は 23 グループある。そのうち 10 グループが女性たちの手しごとの「集まり」である。彼女たちは「〇〇の会」というように団体名を掲げ、手芸品や

エコクラフトによる籠造りなど手しごとを実践している。津波で被災した彼女たちの苦しみや悲しみは計り知れないものがある。にもかかわらず、女性たちは、集会所などに集まって手しごとができることを「つなみのおかげ」であると遠慮がちに語る。震災がなければ、今のように集まって手しごとをする日常を送っていなかったであろうという。

以上のことを踏まえ、本稿では被災地の復興過程における日常的実践について考察するため、女性たちの手しごとを巡る様々な関係性に焦点を当て、実践の場の形成と実践の様相を明らかにする。

2.2 研究方法

本調査では、文化人類学的なフィールドワークが主な調査方法である。具体的には、参与観察とインタビュー調査を行った。近年、人類学的アプローチによる国内の災害研究が進展しつつある。防災研究として被災者の災害体験を記述する災害エスノグラフィや国内外の被災地の復興過程を長期的に調査したものなどがある。金谷 (2008) は、被災地の復興過程について「さまざまな事柄が同時に起こり、変化も早いことから全体像を把握するのが困難である⁹⁾」と述べている。そこで本調査では「現地の文化の全体像を把握するもっとも確実な方法¹⁰⁾」である参与観察を採用した。参与観察は 2014 年 4 月から 2015 年 5 月まで計 50 回行われた。ただし 2012 年 5 月から岩手大学の支援・調査チームによって継続的な田老地区仮設団地での生活環境の調査が行われ、本調査はその一環として行われた³⁾。基本的には「調査者」という立場で参与観察を行ったが、調査が進むにつれて共に制作活動に取り組むこともあった。支援・調査チームメンバーの中には女性たちから時に「先生」と呼ばれるなど手しごとを実践する上で重要な「参加者」となる場合もあった。また、震災前の被災者・被災地の状況や震災直後の災害対応など参与観察で把握できない事柄についてはインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、調査者が調査テーマに沿って自由に質問を構成し、イン

表 1 宮古市田老地区における仮設団地

団地名	戸数	集会所・ 談話室	自治会
S 仮設団地	7 (取壊)	×	×
T-1 仮設団地	248	○	×
T-2 仮設団地	37	○	○
T-3 仮設団地	122	○	○
K 仮設団地	35/33	○	×

フォーマントに自由に回答してもらった。このような形式的インタビューは2時間程度行われ、重要なインフォーマントに対してはインタビュー調査を数回重ねた。また、形式的インタビューだけではなく、非形式的なインタビューも行った。このような方法を採用することで、調査テーマに関するより深い内容や当初は想定していない内容を聞き取ることができた。

3. 本調査の概要

3.1 調査地

本調査の調査地は、宮古市田老地区（旧田老町）である。田老地区は、宮古市の北に位置し、約1600世帯、約4500人が暮らしていた。明治29年と昭和8年にも大津波によって壊滅的な被害を被った田老地区は、大規模なX型の防潮堤の建設や防災システムの整備などを行い、国内外からも「津波防災の町」として注目されてきた。しかしながら、東日本大震災では、約1600戸の家屋に被害がおよび、180人以上の犠牲者を出した。被災後、避難所は寺院や小学校など9カ所に点在していたが、4月1日からはグリーンピア三陸みやこの1カ所に集約された。その

後、仮設住宅はS地区、T地区、K地区の3カ所に建設された（表1）。S仮設団地は学校内に建設されていたが、2014年にはすでに取り壊されている。T地区には407戸の仮設住宅が3ブロックに分かれて建設され、被災者は基本的に被災前の行政区ごとに入居した。しかしながら、T-1仮設団地は、他の2つのブロックに比べ、多数の行政区の人びとが入居しているため、仮設団地内でまとまりづらい状況である。現在でもT-2仮設団地とT-3仮設団地には自治会が設立されているが、T-1仮設団地には自治会がない。K仮設団地は、リゾート施設内に35戸と33戸の仮設住宅が隣接されており、集会所が1カ所ある。

3.2 調査対象

本調査では、宮古市田老地区における女性たちの「集まり」を調査対象とする。震災後、筆者らが現在把握している限りでは、これまでに田老地区において23グループが形成された。そのうち10グループは、女性だけのメンバーで構成され、手しごとを実践している（表2）。例えば、和布で手芸品を製作・販売している女性グループやエコクラフトで籠や小物を制作している女性グループ、日本で1970年代に

表2 宮古田老地区の女性たちの手しごとグループ

Group	活動内容	メンバー	活動時期	活動地域	場所	支援	販売
Gr1	エコクラフト, 手芸	70歳代	2011年11月～	T仮設	談話室	×	×
Gr2	エコクラフト	60~80歳代	2011年11月～	T仮設	集会所	○	○ (一部)
Gr3	裁縫	60歳代中心	2011年9月～	T仮設	集会所→ 仮設商店街	○	○
Gr4	さをり織り	60~70歳代	2011年11月～	被災地区	集会所→自宅	○	○ (一部)
Gr5	ハンモック制作	50~70歳代	2012年1月～	T仮設	各自宅	○	○
Gr6	エコクラフト, PPバンド籠作り	70~80歳代	2012年4月～ 2014年11月	T仮設	集会所	○	×
Gr7	さをり織り	70歳代中心	2013年3年～	T仮設	仮設商店街	○	×
Gr8	エコクラフト	70~80歳代	2014年11月～	T仮設	集会所	○	×
Gr9	裁縫	70~80歳代	不明	T仮設	集会所	×	×
Gr10	さをり織り	60~70歳代	2012年～	K仮設	集会所	○	○ (一部)

生まれた現代手織りのさをり織りを行う女性グループもある。

グループ4を除いた9つの「集まり」は仮設団地内で活動している。活動を開始した時期は、2011年秋以降である。仮設団地に入居した5、6月以降、人々が集会所を利用しはじめ、自然発生的に集まりが形成されたためである。また、被災地区に形成されたグループ4は、被災地区で浸水した集会所で活動していたが、復興工事で取り壊すことになり、現在ではリーダーの自宅が活動場所となっている。

集まりに参加する女性たちの多くは 60 才代から 80 才代の女性たちであり、70 才代が参加メンバーの約半数を占める。そのため、就労している者は少なく、平日の日中に活動する。

多くの女性グループは、支援が契機となって活動を開始している。しかし、支援者と「集まり」との関わり方はさまざまである。例えば、道具や材料を寄付したり、アドバイスするだけで、実践の主体は被災地の女性たちである「集まり」もあれば、販売や品質チェックなど支援者の管理のもと手しごとを行う「集まり」もある。また、大学によるコミュニティ支援者が集会所の予約を代行する「集まり」もある。さらに、現在、外部から直接的な支援がない場合(Gr1やGr9)であっても、支援物資が「集まり」結成当時に彼女たちの活動を促す一要素でもあった。

販売については、グループ5では支援者が販売の一切を担い、グループ3では仮設商店街にある工房や支援者主催のイベントで販売している。一部販売している他の3つの「集まり」は、支援者を通して販売したり、地元ホテルの売店の一角で販売していたりする。さらに、グループ5の一部のメンバーによってグループ6が結成され、後にグループ8へと再編された。このように、時間の経過とともに新たに生成されたり、変容したりした集まりもある。

本稿では、このような「集まり」の多様性を踏まえ、事例Ⅰでは震災前の地域コミュニティのつながりが色濃く残るT-3仮設団地で結成されたグループ2を取り上げ、事例Ⅱでは多様な行政区から入居したT-1仮設団地で結成されたグループ3を取り上げる。

4. 事例Ⅰ：T-3仮設団地における「集まり」

グループ2(以下 Gr2)では、主にエコクラフト作品を制作している。月2回、T-3 仮設団地の集会所に岩泉町から支援者のSさんが来て、全体での活動を行い、それ以外の日集会所で自由に活動する。筆者が把握している田老地区の女性たちの「集まり」

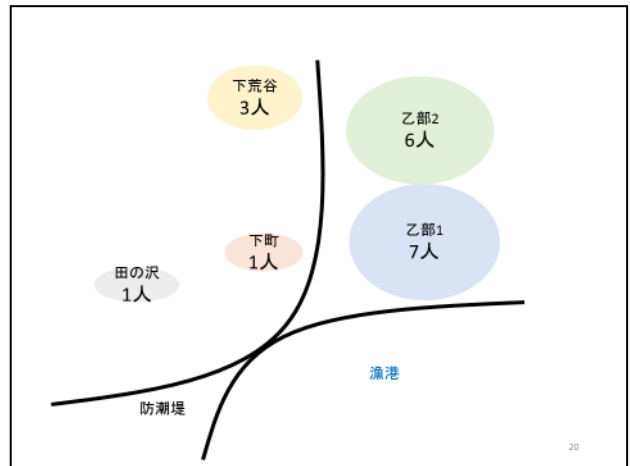


図1 震災前のメンバーの居住行政区

の中では最も多い18人のメンバーで活動している。このグループに参加する女性たちの多くは、震災前に乙部地区に居住していた人々である(図1)。

4.1 手しごとによる忘却と共有

では、なぜ女性たちはエコクラフト作品の制作をはじめたのだろうか。活動が始まった経緯からみていきたい。震災直後、仮設団地内の集会所では、さまざまな地域住民の集会や支援者によるイベントが開催されていた。Sさんも、T-3 仮設団地の集会所でエコクラフトによる籠作りイベントを開催した支援者の一人である。Sさんは、田老出身であり、自らも親類を津波で亡くし、「何か自分にできることはないだろうか」と考えた末のことだった。一ヶ月後、参加したHさんがSさんと再会し、「お年寄りが外に出るように、材料費がかからないで、すぐにできるものを教えてほしい」と籠作りイベント依頼した。Hさん自らチラシを作成し、1回目の活動には30人以上の女性たちが集まった。こうして2011年11月に支援をきっかけとしてGr2の活動が始まった。では、なぜ被災した女性自らが求めた支援が手しごとだったのだろうか。Hさんは、籠作りを始めた時の思いについて次のように語る。

「震災で、やっぱり何か夢中になるものがないと、ただ引きこもっちゃうと大変というのがあったので、やっぱりここさみんな出てくるようなものは何かかなと思って、結局はまってしまったのが、たまたまこの籠。結局、家の中にばかり居れるような状態ではない人たちが結構いたりとかで、自分自身もそうだったんですけど、やっぱり何かをすることによって忘れられる部分もあったし、それでやっぱり集会所さ出て、みんなでやっていたら、笑ったりとか、少しでも忘れられるときもあるのよね。そういう上で

作ったのが、たまたまこう長く今までおかげさんで3年半やった」

以上のようなHさんの語りからは、次の2つのことがいえる。第1に、手しごとをすることで、震災による悲しみや辛さを忘れられることである。確かに、籠造りをしたからといって、津波の辛い体験を完全に忘れられるわけではない。ましてや家族を失った遺族にとって、震災から何年経とうと震災で負った傷は決して癒えるものではないだろう。しかし、さまざまな人が集会所に集い、籠造りをすることで、震災による辛い体験を一瞬でも忘れる時間ができたという。手しごとによる忘却の語りは、他の手しごとの場でも聞かれた。例えば、ある支援者は震災後初めて田老地区でさをり織りを教えた時のことについて、「はじめて行って帰る時に、涙ぐんでいる人がいて、私東京もんだから、言葉きついで、きついこと言ったかなと思ったら、今日一日津波のことを思い出さなかったというの。夢中になってね。それで私も逆に感激というか、びっくりしてね」と語る。このように手しごとをする時間は、女性たちにとって震災の悲しみや辛さを忘れる時間となっていた。こうした忘却の時間はつらい経験を抱える被災者にとって作品を仕上げることや作品の出来よりも重要なことであるといえる。

第2に、手しごとの時間の笑いや楽しみを共有することの重要性である。他者と手しごとをすることで、笑いや楽しみを共有し、悲しみを忘れられるという。震災前から居住区が同じ人々が仮設団地に入居したために、T-3 仮設団地の住民間は互いに声がけしやすい環境だった。メンバーらは、人々が仮設住宅から外に出ず、引きこもりがちなることを気にかけて、集会所でのエコクラフトによる籠造りに参加するよう周囲に積極的な声がけを行った。例えば、代表を務めるTさんもまた、Hさんの声掛けによって、Gr2に参加するようになった一人である。Sさんは自らの参加経緯について、「当初、私は会員でなかったの。私は自分の体がちょっといまいちだったから、ここにも来れなかったし、見なかったし。でも、こちらが『お茶飲みに来たら、うちにばっかりいないで』というのがきっかけになったの、私はね」と語る。女性たちにとって、手しごとの場は黙々と作品を作ることで体が目的ではない。お茶飲みでも構わない。実践の場に参加することが重要だといえる。

このように、女性たちは手しごとの場に参加することで、少しでも震災の辛さを忘れ、他者と笑いや

楽しみを共有する。こうしたことが被災地の女性たちにとって重要な意味を持っていたといえよう。

4.2 学び合う関係性

では、籠造りを通して、どのように他者と笑いや楽しみを共有することができるのだろうか。まずは、彼女たちの手しごとのあり方を見ていきたい。ある日、筆者らが活動日に参加すると、小さな靴の置物を作ろうとしていた(図2)。あるメンバーが本を見て、自宅で作ってきたものを集会所で披露すると、「今日はそれを作りたい」との要望が出されたためだった。最近では狭い仮設住宅でも置き場所に困らない小さなものや実用的なものを作るようになってきている。この日制作していた小さな靴は、まるで人形が履くような可愛らしいサイズのものだった。しかし、今からそれを作ると聞いた筆者らは一瞬戸惑った。親指ほどのその小さな靴は、細かい作業を要することは明らかだった。最年長である80才代の女性も参加する中で、全員がこの小さな靴を作れるのだろうかと多少不安なところがあった。Hさんも難しいのではないかと考えていたほどだ。



図2 集会所で作られた小さな靴

しかし、そうした心配をよそに、メンバーたちは次々と靴を作り上げていった。彼女たちは、自らの作業が一段落ついたり、わからないところがあったりすると、他の女性の作品や制作過程を見るために席を立つ。そして、「ここはどうしたらいいのか」「ここまでできたけども、次はどうするのか」と聞き合い、教え合う。そこには自然とコミュニケーションが生まれていた。

また、Hさんは、自らの手しごとのあり方について、次のように語る。

「みんな自己流なんです。本だとすごく難しくて、作れないんです。こういう本のやつだとね。(自分

でつくる方が) 楽なの。私たちは人数が多い会なもので、みんなが同じのを作るというようなかたちでやっているもので、一人だけが進むんじゃなくて。だから年齢幅も広いので、やっぱりみんなが作れるものというかたちで今までやってきている」

このようなことから、彼女たちの手しごとの特徴として次の2点があげられる。

第1に、既存の「レシピ」はないというである。「レシピ」とは、作品の寸法や作り方のことである。つまり、「自己流」で作品を作り上げる(図3)。もちろん、メンバー全員が本に掲載されていないようなオリジナルの作品を作れるわけではなし、そうしたことができるのは高度な技術を習得した人であろう。しかし、メンバー間の関係性によって、「レシピ」がない状況でも集団でのものづくりは実践される。本に掲載されているような既存の「レシピ」は誰でもアクセスできるが、こうしたオリジナル作品はそれを編み出した人にその「レシピ」を学ばなければならない。第2に、同じものを全員で制作するという点である。月2回の全体での集まりでは、持ち寄った作品などの中から1つを選び、全員で制作する。また、支援者へお礼の品を送るときは、必ず全員が制作にたずさわる。同じものを作ることで、作り方である「レシピ」を共有したり、苦勞する点やその解決方法を共有したりする。

このような状況から、女性たちは、互いに教え合ったり、工夫し合ったりすることで、エコクラフト作品の制作を続けてきた。そこには自然とコミュニケーションが生まれ、学び合う関係性が構築されているといえよう。こうした関係性が構築されていたからこそ、手しごとの楽しみや経験を共有できていたと考えられる。

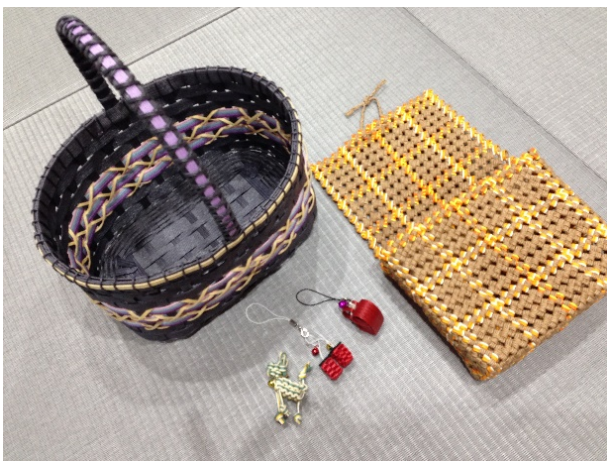


図3 自己流レシピによる作品

4.3 拡散する楽しみの共有

Gr2は、月2回のエコクラフト制作のほかにさまざまなイベントを開催し、メンバーで楽しみを共有している。例えば、年末にはホテルの一室を貸しきって忘年会を開いたり、バスで日帰り旅行にも出かけたりする。20人のメンバーのうち19人が参加したという平成26年忘年会では、ホテル入口に「歓迎〇〇の会」というような看板が立てかけられ、宴会場からはカラオケの楽しげな歌声が聞こえていた。このような楽しみの共有は、メンバーだけにとどまらず、他の仮設団地住民をも巻き込んだものへと発展した。

震災前、乙部地区では老人クラブで「木曜会」というものがあつた。そこでは80才代の女性たち、つまり中核となるメンバーの母親世代が地元の旅館から仕出し弁当をとり、集会所で昔話を花を咲かしていたという。この地域の女性たちの中には、集会所で楽しみを共有する文化が根付いていた。しかし、震災後、仮設団地で「木曜会」は行われなくなった。そこで、Gr2のメンバーらによって、仮設住宅に暮らす高齢者など他の住民を招待して催し事が開催されるようになった。これまでに5回ほど雛祭りや敬老会、盆踊りなどを企画した。イベント時に振る舞われる食事やビンゴの景品などもGr2の女性たちで用意した。その経費は会費や支援者を通して得た籠の販売収益⁽⁴⁾である。

このように、外出することも困難になった母世代の高齢な女性たちにも楽しみの共有は拡散し、籠造りで得た利益は他の仮設住宅住民に還元された。さらに、そうした楽しみの共有は、「木曜会」という共有される歴史があつたからこそ可能になったものであつた。

しかしながら、2013年T-3仮設団地で仮設自治会⁽⁵⁾が立ち上がった。すると、Gr2の女性たちはこれまでの他の住民を巻き込んだ催し事を一切開催しなくなった。Hさんは「仮設自治会ができたので、私たちはもういいかなと思って(開催しなくなった)」と語る。今後の地域活動は、地域におけるフォーマルな組織である「自治会」が担うだろうという女性たちの期待があつた。しかし、これまでに仮設自治会によるT-3仮設団地での催し事はほとんど開催されていない。このように、仮設自治会というフォーマルな組織が立ち上がったことで、結果的にインフォーマルな組織である女性たちの「集まり」による他の住民を巻き込むような実践は継続されなかった。

5. 事例Ⅱ：T-1仮設団地における「集まり」

5.1 日常性の変化と支援

グループ3（以下Gr3）は、和布を使ったポーチやかばんなど着物や帯のリメイク商品を制作・販売している。彼女たちは、結成当初はT-2 仮設団地の集会所で活動していたが、現在は仮設商店街に制作場所と販売所を兼ね備えた「工房」を設けて活動している。現在、メンバーは7人であるが、それ以外に自宅で制作して工房で販売する人もいる。では、どのような経緯でGr3は結成されたのだろうか。

田老地区では、震災直後の4月1日以降、9カ所の避難所からグリーンピア三陸みやこ（以下GP）の1カ所に避難所が集約され、大勢の人々が避難生活を共にすることになった（図4）。GP避難所には多くの支援者が入り、多くの物資が届けられた。このような中で、被災者の一人であるKさんの仲介で、新里地区からAさんが避難所に針や裁ちはさみ、布などを支援物資として持ち込み、帽子や小物など裁縫・編み物のワークショップを開催していた。5月中旬以降、仮設団地が竣工し、被災者は仮設住宅へと移転しはじめた。すると、仮設団地に併設されている集会所や談話室では、多くの支援者によってイベントが開催されるなど仮設団地住民のさまざまな集いの場になっていった。こうして被災地に多くの支援者がかかわる中で、集会所において自然発生的にGr3が形成された。

以上のような事から、Gr3の結成について、次の3点に焦点を当てて考えてみたい。第1に、支援者という「人」である。避難所にいる頃、新里地区の支援者であるAさんが女性たちの活動のきっかけになった。彼女は避難所の一角や集会所において、裁縫や編み物のイベントを開催した。また、彼女は新たに京都の染色家であるYさんを連れてきた。メンバ

ーたちは、「全国からたくさんの支援してくれる人がきたけれども、自分たちはこの2人の支援者のおかげで活動している」と語る。

第2に、支援物資という「モノ」である。支援者らは自らのブログやちらしなどで針やはさみ、布などの寄付を呼びかけ、全国からたくさんの支援物資を届けた。例えば、Yさんは「被災地にお針箱を！」というキャッチフレーズのもと、震災2か月には、はさみや針、布などを支援物資として届けた。Gr3の女性たちは今でも支援物資として届いた道具を大切に使い、「道具がなければこうした活動は何もできなかった」と道具の重要性を語る。

第3に、集会所という「場所」である。集会所や談話室の利用者は、とりわけ女性が多く、現在でも集会所は「女性が集まる場所」として認識されている⁽⁶⁾。またGr3には大量に送られる布や衣服などの支援物資が届けられたことから、活動場所としても物資の保管場所としても集会所は重要だった。

このようなことから支援が被災地の女性たちの「集まり」の形成を促したといえる。しかしながら、すべての支援が女性たちの「集まり」の形成や彼女たちの実践を生み出すことにはつながらないと考える。リーダーであるDさんは、支援者について、「先生が、みんなが喜ぶような身近なもので支援に来てくれたので、たくさん人が飛びついていろんなことをしました」と語る。このことから、単なる支援ではなく、女性たちが「身近なもの」と感じる支援のあり方が、女性たちの「集まり」の形成と主体的な実践につながったと考えられる。

また、彼女たちの日常的な営みは震災よって変化しながらも主体的に継続されてきたものである。Dさんは震災前から和裁を得意とし、地域の人々から着物を仕立てるように依頼されるほどの腕前であった。Dさんだけではなく、田老地区で手しごとをする女性たちの中には、震災前から日常的に手しごとを行っていた人が多い。例えば、Gr3には、パッチワークをしていた人や野染めをしていた人など日常的に手しごとを実践していた女性たちがいる。また、Gr1のメンバーは、もともとレース編みなど編み物が趣味だった女性たちである。さらに、Gr5では、夫の漁網の修理などを手伝っていた女性たちが手馴れた様子でベビーハンモックを編んでいる。これまで日常的に手しごとをしていた女性は、震災によって新たなかたちで手しごとを実践している。震災前の女性たちにとって、手しごとという行為やモノなどがいかに身近であったかが、震災後に変容や差異

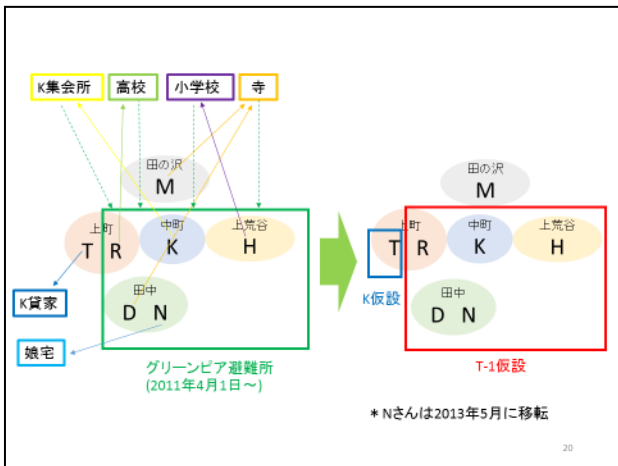


図4 Gr3メンバーの居住区と震災後の居住移動

を伴いながらも、彼女らを再び手しごとという実践へと誘ったと考える。

一方で、震災前まで手しごとをしていなかったという人もいる。Rさんは「こういうこと（手しごと）をやりたいけど、やっていなかった」と語る。Rさんは、震災前にはワカメ加工所で働いていたため、手しごとをする時間もなかったという。しかしながら、震災によって職場であったワカメ加工所が被災したことは、被災後の日常生活を大きく変化させた。避難所での支援者による手しごとのワークショップに参加する過程で、彼女にとっての「日常」は、わかめ加工所での労働ではなく、憧れであった手しごとをする「日常」と変化した。また、Gr2のHさんは、震災後に支援者が来てさまざまな手しごとを体験する機会があったが、狭い仮設住宅で比較的场所を取らずに取り組めること、低コストで楽しめることなどの理由でエコクラフトによる籠造りをするに決めたという。このように女性たちは主体的に選択しながらこれまで経験したことのない長期的な仮設住宅での日常生活を営んでいる。こうした手しごとを実践する女性たちの姿は、時に変容や差異を伴いながら、震災による日常性の変化に対して主体的な選択や決定を行った結果であると考えられる。

5.2 集会所の利用を巡る問題

2011年5月から6月にかけて、被災者たちは、グリーンピア三陸みやこ内の避難所から仮設団地へと徐々に移動した。すると、仮設団地内での集会所が、ボランティアなどによるイベント開催や地元住民の会合の場になっていった。集会所は、多くの人々が集う場所となった。Gr3の女性たちは、当時のことを振り返り、「あの頃が一番楽しかった」「毎日のように集会所に通った」と語る。しかしながら、手しごとをする女性たちにとって、集会所の使用を巡って次の2つの問題が顕在化した。

第1に、集団間の境界性が明確化されることで、集団間に摩擦が生じるようになった。先述したように、2011年秋以降、女性たちは「〇〇の会」というように団体名をつけ、集会所で活動するようになった。当時、仮設団地内にある集会所には、宮古市社会福祉協議会の生活支援員が常駐していた⁽⁷⁾。集会所を利用するためには事前に予約が必要であるし、利用後は利用書に名前など明記しなければならない。こうした手続きは、高齢な利用者にとって時として面倒なものとなる。例えば、20人がメンバーであれば、集会所を利用するには、すべてのメンバーの氏名を記入しなければならなかった。こうしたことから、

社会福祉協議会側は頻りに集会所を利用する女性グループには、利用書の記入を簡潔にするため団体名をつけるようにとの提案があった。団体名をつけることで、団体名のみでの記載で済むし、優先的に集会所が利用できることの説明もあったという⁽⁸⁾。

しかし、集会所が利用しやすくなった一方で、グループ間の境界線が明確になったともいえる。当初、Gr3以外にも複数の「集まり」がT-2仮設団地の集会所を利用していた。しかも、まるで競うかのように、いくつかのグループが週のほとんどを活動日にあてて活動していた。しかし、仮設団地において集団で活動できる場所は集会所に限られている。「場所」を確保できないということは、手しごとを実践する女性たちにとって致命的だったであろう。このような状況の中、集会所の利用を巡って女性たちは苦勞しなければならなかった⁽⁹⁾。それぞれの集まりが名称をつけ活動することで、集会所を巡ってグループ間で摩擦が生じた。例えば、Gr3のHさんは、Gr6のメンバーから「Gr3が（集会所を）借りるためにどうかって文句を言われたの」と語る。このように、複数の「集まり」が形成された仮設団地では、集会所を巡って女性たちの間で齟齬が生じたと考えられる。

第2に、集会所利用のルールとして、販売目的のものづくりをしてはいけないという社会福祉協議会の認識があった。Gr3では、2011年8月頃より仮設商店街でのテント販売や支援者を通してのネット販売を行っていた。しかし、集会所で制作した作品は販売してはならないと社会福祉協議会のスタッフから指摘を受けたという。集会所という公共性のある施設において、私的な利益を得る行為は許可できないとのことであろう。

一方で、Gr3の女性たちは他の被災者にも利益を還元するような仕組みを構築していた。材料として使用する和布は着物の状態であることが多い。そうした着物を、彼女らは集会所に来ることができないような高齢者や縫うことができない高齢女性に解く作業を数百円で請け負ってもらっていた。このように、Gr3の女性たちの実践は孤立しがちな仮設住宅の住民をも手しごとの場に巻き込むような仕組みを構築していたといえる。

このように、集会所を巡ってさまざまな葛藤や困難があったが、それでもDさんは市長との面会の際に直談判するほど販売への思いは強かった。そのため、Gr3は新たな実践の場を探すことになった。

5.3 手しごとにおける新たな展開

2013年3月下旬、彼女たちは、空いた仮設店舗に「工房」をオープンさせた(図5)。仮設商店街に入店することで、共益費などの支出も発生することになった一方で、堂々と販売することが可能になった。つまり、単なる作品から商品として制作するようになる。この時からものづくりに対するこだわりが増してきた。それまでも和布は利用していたが、工房で制作するようになってからより一層こだわっているという。Dさんは、「和柄でもいいのではないかと」と和布の良さを強調する。商品としてリメイクする和布の多くは、箆笥に眠っていた着物や帯であり、全国から支援物資として彼女たちの元に届けられたものだ。Dさんによると、送られる和布は比較的年配の方が着なくなったものであり、「良い物」ばかりだという。そして彼女は続けて茶目っ気たっぷりに笑い、「だって、和布っていいじゃないですか。ほぐして何にでも使えるでしょ」と語る。こうした和布の良さを生かした商品を制作する。

また、彼女たちの手しごとは、商品としてのクオリティが高いということで、支援者を通して東京や京都などのイベントでも販売されている。さらにはフランスやアメリカへも送られ、和布の良さを生かすこだわりとクオリティの高さによって、全国的、または世界的な動きにも広がっている。

例えば、2015年5月、東京で支援者Yさんらによる「東北つぎっこ」展が開催された。そのチラシには「復興応援」や「支援」という文字は見当たらない(図6)。「被災」「津波」という小さい文字が1カ所ずつ記載されているだけである。実際には、イベントでDさんが津波の被災体験を語ったり、出展者もすべて被災地からの参加であるが、まるで都会



図5 商品を並べた工房で制作する女性たち

でノスタルジックな雰囲気を感じられる作品展と思わせるようなチラシに仕上がっている。これを企画したPさんによると、支援や復興応援という側面よりも、むしろ「すごくクオリティが高い物なので、商品そのものに出会ってほしい」という思いでチラシを制作したという。またYさんは「被災者が作ったものだから買ってくださいというのでは長続きしない」と語る。

このように、支援の一環として商品は国内外で販売されているが、被災した彼女たちのものづくりへのこだわりとクオリティの高さは、「東北の手しごと」の素晴らしさを評価する動きへとつながっているといえよう。



図6 「東北つぎっこ」展のチラシ

6. おわりに

本稿では、被災地で女性たちはいかにして手しごとの場を形成し、実践してきたのかを検討した。以上のようなことから、次のような3点が明らかになった。

第1に、手しごとという実践の場の形成にかかわる支援と日常性の変化についてである。従来、復興プロセスにおける外部からの支援は、支援する側の文化やイデオロギーに沿ったものであり、支援される側はその影響を受けるとされる傾向があった¹¹⁾。一方で、被災地における女性たちの手しごとの場は、かつて日常的に慣れた親しんだモノ、あるいはつながりのあった人、行為などの「身近」と感じる支援が契機となり、女性たちは集まり、手しごとの場は形成された。佐伯(1995)は「学びのドーナツ論」の中で、学び手であるIと教師であるYOUとの境界を構成している教材の第一界面とは、『「身近な」ものとして捉えることができる側面である¹²⁾』と述べ

ている。ここで詳細には触れないが、「学びのドーナツ論」とは、「学び手 (I) が外界 (THEY 世界) の認識を広げ、深めていくときに必然的に二人称的世界 (YOU 世界) との関わりを経由する」としたものである¹³⁾。このことは、被災地における被支援者 (I) と支援者 (YOU) との境界を構成する接面のあり方に示唆を与える。つまり、支援者の文化やイデオロギーに沿うことで権力関係に陥る危険性がある被支援者と支援者の関係性において、支援される個 (I) と支援する個 (YOU) との境界に「身近な」ものと感じる接面が存在するということが重要であると考えられる。

また、この「身近な」ものと捉えることができる支援のあり方によって形成された手しごとの場では、単純に震災前の手しごとが継続して実践されていない。例えば、狭い仮設住宅でも省スペースで取り組めるエコクラフトの製作や支援物資で大量に送られる着物を無駄にしないために和布をリメイクするなど、震災による日常生活の変化に対応して手しごとという実践のかたちを変えた。また、被災地における手しごとという実践は、震災前のような単なる趣味としての手しごとではなく、震災による苦悩や困難の忘却と他者との楽しみの共有という意味を含む日常的な営みである。このことは、田辺 (2002) が「日常的実践は、過去の単純な再現ではない¹⁴⁾」と述べているように、被災地という場面において手しごとという実践のあり方やその意味も変化したことを示唆する。さらに、震災後に手しごとをはじめたメンバーの場合、被災した女性と、支援者 (人) や支援物資 (モノ) の関係において「身近」と捉えることができる接面が存在したとはいいたい。むしろ、彼女たちが手しごとという実践に参加したのは、震災によって変化した日常生活をどのように営んでいくのかを主体的に選択した結果である。では、何が、こうした主体的な営みを可能にするのだろうか。李 (2012) は、「破壊の凄みは存在の凄み」であり、被災地には普段はできない実践を可能にする力が存在しているという¹⁵⁾。また、佐伯 (1995) は「学ぶことの価値とか学ぶ意義のようなものへの漠然とした希望」をいっているからこそ人は学ぶと述べている¹⁶⁾。

このようなことから、被災地における女性たちの手しごとという実践の場の形成は、「身近な」ものと捉えることができる支援が契機となる同時に、震災による日常性の変化に対して女性たちが主体的な選択や決断を行い、時に手しごとの意味やかたちを変化させながら、しなやかに対応した結果であると考

える。そして、災害による日常性の変化の中で女性たちの主体的な選択や決断を突き動かしたのは、手しごとに参加することへの「希望」であり、それは李がいうところの「存在の凄み」の表れだといえよう。

第2に、手しごとを巡って集会所は多様な個人や「集まり」の結節点となったということである。田老地区における仮設団地では、集会所に女性たちが集まり、手しごとを実践することを通して、多様な個人と集団が多様な関係性を構築していたといえる。例えば、Gr2 の事例が示しているように、自己流レシピをもとにした作品を共に制作することで、「集まり」のメンバー間では学び合う関係性が生まれた。それは「集まり」における協同的な実践の一側面である。佐伯 (1995) は「人々と『かしこい活動』が協同で営めるようになること」は文化的実践になる¹⁷⁾ことを意味しているという。女性たちが協同的な実践を通して「集まり」内で学び合う関係性が生成されたことは、女性たちの手しごと実践が、佐伯がいうところの「文化的実践」であることを示唆する。一方で、Gr3 の事例が示しているように、複数の「集まり」が集会所を利用する場合、それぞれが団体名を掲げて活動することで、他の集団との境界性が浮き彫りになり、時には手しごとを実践する「場所」である集会所の利用を巡って対立することもあった。このように集会所で、女性たちはさまざまな「集まり」が集団内で協同的な関係を構築し、さまざまな集団のあいだで境界を生成させた。田辺 (2002) は「私たちは社会的世界において、複数の重層する実践コミュニティの境界のあいだで折衝したり、関係を築いたりしながら生きている¹⁸⁾」と述べている。先述したように、手しごとという実践が営まれる集会所では、さまざまな個や集団が重層的な関係性を構築していたといえる。ともすれば、集会所とは社会的世界 (外の世界) への入口であると考えられる。

第3に、女性たちの実践は、単に「集まり」内部だけで繰り広げられるのではなく、葛藤を抱えながらも外の世界に広がっていくということである。例えば、Gr2は高齢者のために仮設団地での敬老会や盆踊りなどを開催した。また、Gr3は集会所まで足を運ばない高齢者など孤立しがちな被災者にも商品を販売した利益を還元できるような仕組みを構築していた。女性たちによる手しごとの場は支援を契機に生成されたが、彼女たちの実践は支援を受けるだけの活動にはとどまらなかった。むしろ、女性たちの実践は他の住民をも巻き込むようなかたちで主体的

な動きへと広がりを見せた。

しかしながら、このように実践する中で他の集団との間に葛藤や対立が生じることもある。例えば、Gr2の事例が示しているように、仮設自治会というフォーマルな組織が立ち上がったことで、結果的にインフォーマルな組織による外の世界に広がる実践の芽を摘んでしまうことにもなった。また、社会福祉協議会は公共的な施設である集会所では、販売目的の商品を製作することを認めなかったことで、女性たちの実践が困難に直面することもあった。しかし、このことを外からの介入が女性たちの主体的な日常実践の障壁になったという理解は適切ではないと考える。このことは、外の世界がさまざまな立場や視点が存在する世界であることの表れである。女性たちの手しごとという実践は、田辺がいうところの「社会的世界」、あるいは佐伯がいうところの「THEY世界」への認識が広がり、多様な関係性を構築する過程にあると考える。

こうした女性たちの実践は、もはや被災地や復興という文脈だけでは語ることはできないはずである。しかしながら、現在、「東北」と表現されるとき、その多くは被災地のことを指す。例えば、作品展のチラシの「東北の手しごと」とは被災した女性たちの手しごとのことであった。それは手しごとのクオリティの高さによって「東北の手しごと」と表現できたのだが、なぜ人々は「東北」＝被災地という文脈で理解するのだろうか。この点は、日常実践を考察する上で重要となるアイデンティティの問題に深くかかわっていると思われる。しかしながら、本稿では手しごとを実践する被災地の女性たちのアイデンティティに関しては検討しきれていない。復興プロセスにおいて、被災者を取り巻く社会がどのようなまなざしで被災地を見つめ、また被災者がどのように社会にかかわりながら自らのアイデンティティを再構築、または変容させるのか。今後も被災地における多様な関係性や日常実践を丹念に解き明かしていく必要がある。

7. 謝辞

本論文の現地調査は、宮古市東日本大震災記憶伝承事業を受けて行われた。調査では宮古市田老地区の住民の方々、田老地区で支援活動されている方々から多くのご協力を頂いた。ここに記して皆さまに感謝の意を申し上げたい。

補注

- (1)本稿では、木村(2013)の議論を踏まえ、「集まり」という言葉を採用する。
- (2)例えば、田辺繁治・松田素二編(2002)『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社
- (3)南正昭他(2014)「壊滅的被災下における住民主体によるコミュニティ再生の支援に関する実践的研究」『土木学会論文集F5』Vol170No2, p46-55を参照されたい。
- (4)Gr2では月100円の会費をコーヒー代として徴収している。また、基本的に販売は行っていないが、Sさんの友人に作品の一部を販売することで得た収益は、個人には入らず、すべて会に入っている。
- (5)T-3仮設団地の仮設自治会長は男性である。宮古市社会福祉協議会は仮設団地における自治会の発足に積極的であった。現在、宮古市の仮設団地62カ所のうち14団地で仮設自治会が立ち上がり、6団地で解散、14団地で既存の自治会に参加している。
- (6)一方で男性が集まる場合はNPO団体が開く談話室やGP敷地内の喫煙所(T-3仮設周辺)である。特に喫煙所の集まりは、被災前の浜での集まりを基盤として形成されている点は興味深い。T-3 仮設団地は男女ともに震災前の地縁を基盤にした関係性が構築されていると考えられる。
- (7)26年度以降は、支援員は配置されていない。
- (8)住民インタビューによる
- (9)Gr1は、集会所の利用を巡る問題を回避するため、いち早く活動場所をT-1 仮設団地の集会所からT-2 仮設団地の談話室へと変更した。

参考文献

- 1) 宮古市社会福祉協議会(2014)
<http://www.miyako-shakyo.or.jp/> (2015-03-29)
- 2) レベッカ・ソルニット(2013)『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか?』亜紀書房
- 3) 木村周平(2013)「津波災害復興における社会秩序の再編—ある高所移転を事例に—」『文化人類学』78巻1号, pp57-80
- 4) 林勲男(2008)「集落移転と土地権—1998年アイタベ津波災害被災地復興への課題—」『アジア・太平洋地域における自然災害への社会対応に関する民族誌的研究』平成16年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書, p1-26
- 5) 金谷美和(2008)「災害移住—インド西部地震被災地カッチ県の復興・開発—」『アジア・太平洋地域における自然災害への社会対応に関する民族誌的研究』平成16年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書, p67-104
- 6) 田辺繁治・松田素二編(2002)『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社, p3
- 7) 同上 p8
- 8) 佐伯胖(1995)『学ぶということの意味』岩波書店, p146
- 9) 金谷美和(2008)「災害移住—インド西部地震被災地カッチ県の復興・開発—」『アジア・太平洋地域における自然災害への社会対応に関する民族誌的研究』平成16年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書, p69

- 10) 菅原和孝 (2006) 『フィールドワークへの挑戦』世界思想社, p45
- 11) 齋藤千恵 (2012) 「インド洋津波被災地アチェにおける女性の経済活動とイスラム教」『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』 No. 19, pp49-64
- 12) 佐伯胖 (1995) 『学ぶということの意味』岩波書店, p73
- 13) 同上 p65-p78
- 14) 田辺繁治・松田素二編 (2002) 『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社, p3
- 15) 李仁子 (2012) 「外国人妻の被災地支援—被災地の民族誌に向けた一素描」『3. 11 後の多文化家族』明石書店, p139-161
- 16) 佐伯胖 (1995) 『学ぶということの意味』岩波書店, p2-p10
- 17) 同上 p93-p96
- 18) 田辺繁治・松田素二編 (2002) 『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社, p17